

季節の折々に

串田孫一



未来社

季節の折々に

串田孫一

未 来 社

著者略歴

串田 孫一（くした・まごいち）

詩人・哲学者・随筆家。

1915年、東京芝に生まれる。

東京大学文学部哲学科卒。

東大在学中より執筆活動をはじめ、卒業後、福永武彦、矢内原伊作らと文芸誌を出すなど、戦前から文学活動を展開する。戦時中、戦後は哲学・思想関係の著述が多く、人生的思索に富んだ幸福論、人生論を綴る。また登山家として山のエッセイ、絵画にも人気を博す。

1965年まで東京外語大をはじめ東京高校、国学院大学、武蔵野美術学校などで哲学を講じる。

【主な著書】

「孤独なる日の歌」「愛の彷徨」「若き日の山」「雲・岩・太陽」「山と別れる峠」「上高地」「山の断想」「愛の断想」「季節の断想」「美の断想」「旅の断想」「花の町で見た愛」他

季節の折々に

定価1400円

1985年9月25日 第1刷発行

著 者 串 田 孫 一

発行者 西 谷 能 雄

発行所 株式会社 未 来 社

東京都文京区小石川 3-7-2 〒112

電話(03)814-5521～4 振替・東京 7-87385

印刷・製本／図書印刷

乱丁・落丁本はおとりかえします。

季節の折々に

目次

I 春

樵夫の春	八
村の子供	一〇
河口	三
顕微鏡	一四
発電所	一六
夕空の雲	一八
山の絵	二〇
万華鏡	二三
居眠	二四
空	二六
井戸	二六
悪魔	二八
異邦人	三
指	三四
啓蟄	三六

高度計	三六
魔法壘	四〇
雑記帳	四三
約束	四四

Ⅱ 夏

星の伝説	……	四
便り	……	五〇
双眼鏡	……	五二
砂漠	……	五三
蛭	……	五五
昂	……	五九
夕べの鐘	……	六〇
一番電車	……	六三
装丁	……	六四
休憩室	……	六六
体操	……	六八
電気スタンド	……	七〇
帰り道	……	七三
諺	……	七四
放送	……	七六

蔵	……	七九
音	……	八〇
土産	……	八二
掲示板	……	八四
硝子	……	八六
海水浴	……	八八
植物図鑑	……	九〇

III 秋

汽車の窓	九四	展望台	一三四
山の星 海の星	九六	裾野	一三六
旅人の悦び	九八	花瓶	一三八
林の小径にて	一〇〇	モザイク	一三〇
絵の中の秋	一〇二	麵麴	一三三
空中散策	一〇四	設計図	一三四
教科書	一〇六	自動車	一三六
天文台	一〇八	山小屋の夜	一三八
白樺	一一〇	吃驚箱	一四〇
レンズ	一一三	戸諦り	一四三
ランプ	一二四	道づれ	一四四
型録	一二六	真珠	一四六
獨楽	一二八		
聲	一二〇		
寂しさ	一二三		

IV 冬

天に昇る龍	一五〇	曲り角	一七九
新しい星座	一五三	祈り	一八〇
罌	一五五	電報	一八二
鍵	一五五	単独行	一八四
懐中電灯	一五九	泣寝入り	一八六
村の教会	一六〇	弥次郎兵衛	一八八
後姿	一六三	マツチ箱	一九〇
風	一六四	烏瓜	一九三
炬燵	一六六	籤引	一九四
寒波	一六六	オルゴール	一九六
磁石	一七〇	三日月	一九八
カレンダー	一七三	藁沓	二〇〇
仮装行列	一七四	刺繍	二〇二
終着駅	一七六		

装幀・口絵Ⅱ串田孫一

I

春



樵夫の春

二日ばかりで雪の山を越えて来た翌日は、勿体ないような穏かな天気であったが、休養に決めたので朝もゆっくり起きた。それから僅かの食糧とお茶を入れた魔法壺を携えて、川を渡り、向いの森のまだ雪がたっぷり残っている斜面を一時間程ゆっくり登った。大きな山毛櫨ふなの木の間を歩き易い角度で登って行くのは楽だった。雪の上には兎の足跡が沢山あったが、跳ねながら急斜面を登って行く姿も随分見掛け
た。

歩いて行く間に、既に木に打ち込む斧の響きが聞こえていたが、次第にその方角へ近寄って行くと、鋸を使っている音だの、樵夫きこり達の話声も聞かれるようになって

来た。そして更に近附くと、その斜面を大きく曲って行く雪の溝が作られていた。

それは、ボブスレーやトボガンの溝に似ていた。あれ程綿密に整えられてはいないが、カーヴのある外側には雪が土手のように盛り上げられていた。これは雪国の樵夫達の、古くから伝えられている一種の知恵で、二間程の長さに切った太い木をこの溝にころがし込んで、谷へ流す、木流しである。

この雪の溝を利用出来るのはそう長い期間ではない筈だし、この期間をはずしてしまうと、伐採した木を運び出すのには大変な労力が要するのだろう。

私はその溝に沿って谷の方へ下った。その間に五、六回鈍い響きを立てて材木が滑り下りて来た。溝から飛び出すようなことは絶対にあり得ないと思っても、溝の脇に立って見てはいられない勢いであった。

冬の間はどんなにいい天気の時でも、山の何処かで吹き荒れている風の音が絶えず聞こえているものだが、今はそうした自然の音が全く途絶え、樵夫達が斧や鋸を使う手を休めると、暫くの間は無音の世界になるのだった。そして堪り兼ねて私は咳払いをした。

村の子供

残雪がなお豊かに光る山々が今日はいやに近く見える。眼が望遠鏡になったような気がする。村の雪はもうすっかり消え、ひと頃はぬかるんでいた道も程々に乾いて、村は木々の芽吹きに囲まれてしっとりしている。

村の子供達も急に大きくなったようだ、納屋の脇で伸びをした農夫が思った。全く手に負えなくて、彼も何度か真剣に尻を叩いた子供が、まるで大人の仕種のよう、胸の上に腕を組んで空を見ている。気分がいいのだろうか、あんな恰好をして一体何を考えているのか。

継ぎだらけの股引を穿いている子供もいなくなった。自分達が子供の頃には、買

っては呉れてもなかなか着せては貰えなかったような服が普段着になった。尤もその方が股引などを作るよりはずっと安上りなのだから、世の中の移り変りは面白いものだ、その農夫は思った。

川へと下る坂道を子供達は走って行った。晴れ渡った青空の下では、動くものも動かないものも輝いている。子供達は無論はつきり意識などしていかないだろうが、未来へ向って走っているような気分を味っている。そのためなのか、お互いの口のきき方が大人っぽい。この季節に木々が新しい枝を伸ばすように、子供達も今は目立って育つ時期なのかも知れない。

川原へ下りて来た子供達は、遊び方を忘れてしまった訳でもないのだろうが、それぞれ具合のよさそうな石を選んで腰を掛け、何の話をするのもなく車座になっている。眩しい日光に目を細め、眉根を寄せたりしているので、みんな利口そうな顔をしている。来年から学校だという子供まで、尤もらしく仲間に加わっている。

その中の一人が指差し、みんなその方を見て笑う。陽炎が立って、流れの向うの木が体をくねらせているのが面白いのだろうか。

河 口

雨が降っていた。

時々止んだが、そんな雨をいつまで見ていても仕方がないので、傘をさして川の土手へ出た。そこは最近、自転車を走らせる道に指定され、天気の良い日には上等な自転車に乗った若い人達が次々に勢いよくやって来るので、散歩には不向きになってしまったが、雨がこんなに降っていると、流石にそういう人達の姿は見えなかった。川下に見えている鉄橋のところまでは行ったことがあるが、その先を知らないのも、土手の上の道を河口まで歩いて行った。

川の水嵩は増し、その水もかなり濁っていた。一度砂浜に出たが、そこでまた雨

は強くなった。たっぷり水を含んだ砂の上を傘をさして歩くのは奇妙なものだったが、雨宿りをする場所もなく、河口へ行って見た。

左程川幅の広い川ではないが、流れ込む水と打寄せる波が、到るところでぶつかり合い、そのために砂が掻き廻されて、濁り方は異様な色をしていた。絵具のついた筆を何度も洗った筆洗の水を聯想させた。

これが長い距離を流れて来た水の最後かと思つて見ていると、凄じい容子ようすだった。海水はそこで余計に波を荒々しく不規則に立てて川の水を寄せつけまいとするし、川の水はそこで遠慮をしていたら行き所もないので、波が引いて行くのを見定めて、どっと海へ流れ込んで行った。争うわけではないが、そこだけを見ていると生きものの争いのように見えた。

地球の上の陸地には数知れない川が流れていて、これらが休むことなく海に流れ込んでいる筈であるが、何処の河口でも似たような光景を見せている。川の流れの終りに待ち構えているこの宿命を、川は蛇行を繰返しながら考えて見たこともなかったらう。

河 口

顕微鏡

一人息子を戦争で亡くした未亡人がいた。そういう人は幾らでもいたろうが、慰める言葉もなく困った。

然し、しっかりしたところがあって、子供のことを想い出すような、遺っている品物は殆ど全部処分をして、全く新しい生活に切換えたと言っていた。

私も子供の頃から何かと世話になっていた人で、急に疎遠になるのも悪いので、時々訪ねていた。戦争の後のひどい生活から少し明るい陽射が感じられる頃だったが、その人は座敷の窓に向ったところに小さい机を出して顕微鏡を熱心に覗いていた。私もちょっとそれには驚いた。